風韻

創刊号

神戸大学風韻会

於　神戸国際会館　　神戸大学文化フェスティバル
昭和35・7・9（土）　　連吟「熊野」

宇治師範、藤井先生、米花先生、荒川先生及び先輩の方々
昭和35・3・6（日）　第八回卒業生歓送会の日に

風韻 創刊号 目次

巻頭言 …… 原　敏郎 …… 1
風韻 …… 師範 宇治正夫 …… 2
謡って三十年 …… 藤井　茂 …… 3
繰り言 …… 音　申吉 …… 5
箇台に於ける謡の思い出 …… 国重　猛 …… 6
謡曲雑感 …… 西尾雄一 …… 8
雑感 …… 松田幸次郎 …… 8
思い出すまま …… 和田慎三 …… 10
大阪市大能楽研究会 …… 村岡竜馬 …… 11
謡雑感 …… 大角征矢 …… 12
能の理解のために …… 牧　千雄 …… 15
日本民族と能 …… 永田守男 …… 17
能と現代 …… 里井三千雄 …… 20
誌上研究室 …… 松岡誠夫 …… 21
第6回コンクールの感想
—11人の山伏涙をのむ— …… 福田好男 …… 23
草津恋しや—嵐の中の白根越え— …… 広瀬義弘 …… 24
昭和35年度風韻会活動総括 …… 27
風韻会々員名簿 …… 30
編集後記 …… 42

表紙題字は宇治正夫師範筆

巻頭言

原　敏郎

一度限りのしかも人生の花といわれる大学時代であってみれば、お互いに社会に出てからふりかえって見て、有意義であったと思える様な大学生活を送りたいものです。有意義という言葉は人それぞれによってとりかたがちがうでしょうが、学問を修得するかたわら趣味を同じうする者が集ってクラブ生活をたのしみつつそこに全福の人生を感じ得るならば、それだけでも充分というべきでしょう。

私も六甲台の生活を省みて、謡という趣味を通じて結ばれた者の集いである「風韻会」に所属したことを心から良かったと思う者の一人です。皆と共に音吐朗々謡うたのしさは言うまでもなく、「謡」そのものから色々なことを教わったと同時に、良き師、良き先輩、良き友に恵まれたことは、大学生活の何にもかえがたい収穫だったと思うからです。

昭和七年に宇治正夫師範をお迎えして、発足した神戸大学風韻会が以来約三十年脈々として今日に至り、ますます隆盛の一途をたどっていることはよろこばしいという外ありません。素謡と仕舞だけという今の風韻会の活動を昔のそれに比べてみると、ずいぶん見劣りがするようですが、要は、いつも皆が楽しい雰囲気の中ですごせる風韻会であることを第一の目標に、活動内容の不十分な点は今後徐々に挽回していきたいと思います。

社会に出れば何かと多忙になり、学生時代に比べて謡に親しむ機会も少なくなると思いますが、謡だけは一生の趣味としてもちつづけたいものです。そのためにも風韻会の春秋二回の大会、夏の合宿以外にも卒業生が参加できる様な機会をできるだけ多く作りたいと思います。風韻会が現役学生の活動の場であると同時に、卒業生にとっても、いつまでも風韻会一年生のつもりで自由に参加できるようなそして又憩いの場でもあって欲しいと思うのです。これは卒業していく私の後輩諸君へのお願いです。

「風韻」創刊を機に、現役会員、卒業生会員の連絡を一段と密にし、以て風韻会今一層の発展を期そうではありませんか。

（神戸大学風韻会九回生幹事長）

風　韻

師範　宇治正夫

風韻会と云う名前は漢学者、高階柳蔭先生（私の幼時、隣家に住んでおられ、謡は先々代観世清廉先生の門下）につけて頂いたものであり、生れて四十数年になります。

昭和の初め、神戸大学の上筒井時代、野瀬虎一氏が物凄い積極性を以て、私を口説かれ、私としては余り親交のあった程ではありませんが、伊勢普宣氏がその当時教えに行っておられたのを知っていたため、その了解があれば参りましょうと返事していた次第で、同氏の執著を考えると実現不能の事だろうと思っていた次第であります。

ところが、その当時大学のリーダー格であった高崎貞男（大本）国重猛、生田八郎、田岡映好氏等が運動され、到底不可能と思っていた伊勢氏をして、私にどうぞ頼むと云われる様に仕向けられたのには驚きました。

その後隆々として進展し、五校連盟、六大学時代には何時の会でも他校を引離して、優位を占め、諫山勝保、前田一二氏の頃には特に目覚ましいものがありました。

戦時中、一時休止しましたが、終戦後いち早く戦前にも増す興隆をみたことは、ひとえに藤井先生のお蔭と思っています。

もともと不才の私が一層未熟であった頃、私の為に働きかけて頂いた方々、以後次第に集って頂いた方々の恩を思う時、誠に感謝に堪えない次第でありますが、これを顧る時、何一つとして風韻を伴なわざるものはないと云う様に考える様になりました。

又世常一般の取引と云う場合でも、その人の話方、態度あらゆるものに風韻のある事を見出して接すれば人生百般非常に潤を持つのではないかと思う次第であります。

この三十年間に神戸大学を卒業された多くの方々が、風韻豊かな心持で社会で活躍されている事を思いますと私の心も独でに豊かになります。

又代々の幹事諸氏にそれぞれに優れた人が出られ、今回歴史をまとめて、一つの誌とされるようになった事はこの上もない有難い事だと思います。

それぞれの人の働き、又自然の風物にしても益々、風韻豊かなる成長を遂げ、住み良き社会のだんだん大きくなる事を祈って止みません。

謡って三十年

藤井茂

エコノミスト誌の本年正月特別号に「先生の余暇」と題してグラフィア版で、わたくしの謡っている姿をのせ、「謡って三十年」と書き添えてあります。学問の道に入って二十八年ですから、それより二年長いわけで、余技として随分念の入ったものになりました。

学生時代には上筒井の寄宿舎に居たので、その道の先輩学生達が親切に個室までやってきて稽古をしてくれたものです。当時は鞍馬会といっており、伊勢普宣氏が師範でした。卒業の時に関西四大学連盟で「百万」のシテを割当てられましたが、今から思うと冷汗ものでした。

卒業の前頃から宇治先生に来て頂くことになり、当時の幹事の大本（旧姓高崎）氏、国重氏、生田氏などが随分御奔走になりました。わたくしは卒業間際でもあり直接関係しませんでした。

昭和七年四月から晴れて宇治先生を迎えて会の名も宇治先生の会名をそのままに神戸商大風韻会に更めて、上筒井の学生会館で稽古が始まりました。わたくしは母校に助手として残りましたので、学生諸君の稽古のすんだあとで宇治先生に御指導を受けることになりました。そのうちに八木弘教授や白杉三郎教授（当時はいづれも助手、白杉氏は数年前逝去）が参加され、学舎が六甲台へ移ってからは、川上教授、金田教授（現神戸大教授）も加われ、教授グループの稽古には川上邸や金田邸を拝借しました。その間に花戸教授（現名誉教授）、古林教授、水谷教授、柚木教授、丹波教授、佐野教授（現講師）、加藤一郎教授、生島遼一教授（現京大教授）等が参加され、偉観を呈するようになりました。稽古は長い間生島邸で行われました。生島夫人も熱心でした。わたくしは幹事役で、水曜日の夜が稽古日で、初めから終りまで稽古の場で端座して御世話役をつとめたものです。こうして皆さんの稽古を聞いているうちに会得することも多く、ひとりでに暗記もするようになりました。

こうしたのどかな生活が戦争が激しくなるまで続きました。今思い出しても心温まる好き日々でありました。同好の教授グループではよく謡会を開きました。学生の謡会にも教授方の参加が多く、倶楽倶進そのものでした。そのうちに戦争がはげしくなり、生島邸での稽古も中止のやむなきにいたりました。学生の稽古もそれより前に中止になっていました。学生の大部分が出征して行き、風謡会の幹事から出征に際して後事を托されたときの悲痛な感懐は今も忘れることができません。

それでも佐野教授とわたくしは戦争中もずっと宇治先生から離れず、社中数人という状態になっても謡い続けました。当時地方から軍需工場へ徴用された娘さん達が、お正月も郷里に帰えらず、寮で過ごしているのを宇治先生が気の毒に思われ、謡と仕舞で慰問されたことがあります。わたくしもその一行に加わって寒い正月をあちこちの寮を訪ねました。その御蔭で御同行の謡や離子方の本職の先生方と親しくして頂くようになりました。きびしい戦争の中で、人

間修業と心得て謡い続けたことは今でも快い思い出であります。

× × × × × ×

戦争がすんでからは、とりあえずわたくしの家で稽古を復活し、米花教授が参加されました。そのうちに柚木教授が再び稽古を始められたので、柚木邸が稽古場になり、新たに荒川、山瀬、則武、向井の諸助教授が参加され、戦前の面影を復活しました。その中で荒川助教授は今日まで稽古を続けておられます。

戦争直後、学生が続々復員して学園は昔の賑やかさをとり戻しました。しかし生活は苦しく、学園風景も索漠としていました。たまたま、わたくしのゼミナールの桑原朔郎君（旧制一六回）が謡曲部復活を企て、相談に参りました。そこでわたくしは風韻会の歴史を語り、宇治先生の御来学を願って、再び学園から朗々たる謡声が聞えるようになりました。焼土の中から萠出る若草を見るにも似たよろこびを感じたことです。風韻会は戦後の学園で最も早く復活した部の一つでありました。

世が次第に平穏に復し、生活も安定するにつれて謡曲が戦前にも増して盛んになりました。学生の風韻会も日々盛大に赴き、戦前以上の盛況であります。宇治先生の終始変らぬ熱心な御指導と、歴代幹事の努力、先輩各位の御声援、現役学生の熱意の賜であると尊いことに思っております。

× × × × × ×

謡って三十年。長い思い出であります。この間にわたくしは謡によって種々の余徳をめぐまれました。第一にこの三十年間殆んど病気らしい病気もせずに健康にめぐまれました。ひそかに思うに、これは謡によって呼吸を整える途を自得したためであろうと思います。石黒正気療法という健康法を三週間講習を受けたことがありますが、「お前の呼吸は正気（正しい呼吸）に合している」といわれ意を強くしたことがありました。第二に、講義をしても余り声を浪費せずにすみます。教室や講堂の大小で声を調節するわけで、職業柄大変役に立ちます。第三に、それらよりもまして、わたくしは人間修業をさせて頂きました。わたくしにとっては学問は生命であり、その面では一歩も譲れません。その結果、人間が自信過剰に陥り易いのではないかと案じます。謡の方ではいくら上手になっても到底本職の先生には及びませんし、得意になったとたんに宇治先生に厳しく直されて謙虚にならざるを得ませんでした。宇治先生は「直おす値打ちが出来たから直おすまでのこと」と淡々と言われますが、わたくしにとっては意味深くありがたい訓言であったと感謝しております。

わたくしはこれからも謡い続けたいと思っています。宇治先生には今後共に謡の先生としてのみならず、心の師として御指導を仰ぎたいと思いますし、同窓同好の各位や現役の学生諸子とは同じ楽しみを分ち合うものとして、一緒に謡って行きたいと願っております。

（昭和三十五年十二月三十一日）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

繰り言

音申吉

宝生会からも同様の御申付で。何か申上げて置きました。其続きのつもりで。

若い時から地味な此道に入り、年寄り臭い趣味だと思われながら数十年是一つを楽しんで来たが、今古稀に到って「よくぞ若い時から謡に精進を続けて来たものだ」と喜んで居ります。幼時は虚弱で小学校を卒える迄は蒲柳の身が、酒を愛し煙草を嗜み、何の健康法と云う事もせず、中年以後は健康此上なく茲三十年以上後述の流行病以外医薬の世話になった事が無い。

一昨年夏、人間ドックで六日間の精密検査を受けたが、前立腺稍肥大（是は年齢的に不得已）以外は全部甲の上。特に賞讃を受けたのは硬化傾向皆無と脊推骨格。ドチラも四十歳台の状態と云われた。脊推の方はレントゲン写真で見ると骨の一つ一つが軟骨を挟んで正常の間隔を置いて垂直に並んで居る。内科部長から健康法を尋ねられたので、謡でしょうと答えたところ、先生妙な顔をして居た。多分音曲無縁の人だったろう。正座発声数十年の効果と私は確信して居る。

もう一つ、満洲で働いて居た私は、敗戦後新京の抑留生活中に発疹チブスで倒れた。当時奥地からの避難者で混乱の内に、発疹チブスが猖獗を極め元気な人々がドンドン斃れて行った。五十六歳の老人が倒れる間際迄酒を飲んで居たのでは到底見込は無いと一応院長に宣告されたそうだが、三日二晩の高熱失神状態の危機を脱して正気付いた時は若い医者が脈を握って居て呉れた、折柄軍倉庫から街に流れ出た強心剤の注射を、脈膊が衰える毎に打ち続けて呉れたそうで、此間に百二十四本注射して居る。回復に向ってリンゲル注射をする時、院長（チャムス医大班の内科部長であった博士）が来て呉れた。其頃のリンゲルは二合瓶位の大きなものであった。是が気持よく吸収されるのを見て院長が云うた。是は普通の人で四十分、五十六才ともなれば五十分を要する。貴殿は八分間で吸収した。実に血行の良い躰質だ。担ぎ込まれた時見込は無いと思ったが応急手当として強心剤を注射したとき此異常を発見して学生（若い医者と思うたのはチャムス医大の学生だった人）を付添わせたが、健康法は？と問われた。私は此時も謡のお蔭だと思った。

私には私なりの多少科学的な理屈もあるが長くなるから書かない。卑近な例としても、頑健な相撲や運動選手達が短命なのは、不用意に運動を止めて呼吸による内臓の強健法を忘れる為だと思う。坊さんの長命、殊に芝居役者の大物となると日々が大音声の生活だから、若い時から脆弱だった吉右衛門丈でも相当長命を保つ事が出来たと思う。

風韻会の諸兄を祝福と共に、長く長く此道に精進して頂き度いと云う老人の繰言です。

筒台に於ける謡の思い出

学部二回生　国重　猛

筒井ケ丘学園生活六ケ年を通じ、数々の思い出の内、一番懐しく思われるのは謡曲部活動である。昭和二年四月予科一年入学後間もなく、小山末夫、生田八郎、高崎貞男其の他の諸兄と共に観世流謡曲部「鞍馬会」に入会した。

鞍馬会が何時頃発足したかは聞き洩したが、相当古い歴史があった模様で、当時の師範伊勢普宣氏は兎に角謡曲部のメンバーは皆自分が一番上手だと、鼻の高い大天狗小天狗の集りだから「鞍馬天狗」よりとって「鞍馬会」と命名した、と説明された。成る程先輩伴健次郎、岡田嘉彦、西本源太郎等の諸兄は、大天狗組と云うか、誠に堪能の士にて、その謡い方の妙は何とも云えず、全く羨ましく思った。

之等先輩の後輩稽亭も亦熱心で、毎日昼食時及び放課後には学生会館に部員一同を集め練習を続けた。部員の熱の入れ方も日一日と加わり、中には週一回の合唱教授に飽き足らず、師範宅に単独稽古に通う者も出て来た。寄宿舎に於ては、隣近所の部屋を歩き廻り、無理矢理に弟子をとって強制的に稽古をしている熱心な者も出て来た。藤井茂教授も当時は一寄宿舎生にて、無理矢理に弟子にされて、迷惑を蒙られた被害者の一人である。

校内活動の主なものは、年一、二回他流（宝生流宝生会、喜多流喜松会）との合同謡曲大会、或は尺八の会（都山流周友会、琴古流青葉会、上田流竹栄会）との合同邦楽大会を開催する事だった。校外活動としては丁度其の頃、昭和五年に大阪商大（民謡会）、関西大学（能楽会）、関西学院大学（観声会）、神戸商大（鞍馬会）の四校聯盟の関西学生聯合謡曲会が結成され、毎年春秋二回阪神各地にて大会を開催した。因に当時は古典趣味の研究が盛んになり、謡曲通も黄金時代を現出しつつあった。

昭和七年三月、専門部最終生たる二十六回生を送り出し、会員も学部学生のみとなるに及び、心機一転を期し、師範を交替して貰う話が持上がり、幹事の間に於て着々折衝が続けられた。師範を交替して貰い度い理由は種々あったが「従来希望が満せなかった仕舞の稽古も出来る先生を迎えたい」と云うのが主なものだった。

昭和七年五月、会員一同が切望していた先生――当時神戸にて活躍されていた錚々たる若手の師範――をお迎えする事が出来た。それが宇治正夫先生である。

宇治先生を迎えてより面目を一新した。会名も「神戸商業大学観世流謡曲会」と改称し、素謡の他に仕舞の稽古も始めた。会の組織運営を規制する為「会則」「役員選挙細則」「稽古細則」「練習細則」「夏期キャンプ細則」「事業細則」等が幹事に於て草案された。（以上の草案別添）草案審議中に私等二回生は卒業となったので実際制定されたかどうかは不明である。

昭和八年一月廿八日、大講堂に於て、私等学部二回生の卒業送別謡曲大会が催された。宇治先生にシテをお願いし、私がワキで「藤戸」の番囃子を演った思い出の番組を再録して見よう。

謡

素　天女　大野一若
ツレ　松永清次
賀茂　岡田正次　井村好雄　吉野綾治　荻野良郎

連吟

鵜飼　井上耕一　梅原亀一
子方　川上太郎
ツレ　白杉三郎
草紙洗小町　八木弘　藤井茂

番囃子

セミ　高崎貞男　生田八郎
蟬丸　藤本政次郎　下村英一　川越英治　椎井末治

仕舞

合浦　南盛雄
春栄　本間孝之助
八島　松永清次
玉葛　荻野良郎
網之段　岡田正次
天鼓　井村好雄

藤戸　宇治正夫　国重猛　下村英一　川越英治　椎井末治

祝言

終りに、私の学生時代共に観世流謡曲部にて活躍された主な方々のお名前を列記して、当時を偲ぶよすがとしたい。

（略敬称）

（二十三回生）伴健次郎、岡田嘉彦、野々村博、売間光男
（二十四回生）西本源太郎、吉岡篤三、播本秋一
（二十五回生）小山末夫、森秋一、西村一雄、中川五郎
（二十六回生）田岡映好、西宮重和、森英夫、佐田弘邦、宮副彦四郎
（学部一回生）長谷川喜久雄、藤井茂
（学部二回生）生田八郎、高崎貞男、森貞信親、伊予又夫、石崎治郎、国重猛（私）
（学部三回）藤本政次郎、岡田正次、井村好雄、松永清次、荻野良郎、大野一若、吉野綾治、長野清、長岡忠一、跡見博光、山田利吉郎
（学部四回生）南盛雄、本間孝之助、岡野文矢、井上耕一、梅原亀一、川田亨

以上（昭三六・一・二九）

後記

宇治先生には約三十年後の今日尚御健在にて、引続き母校に師範として御尽力下さっている事は誠に感謝に堪えない。私自身も亦、現在宇治先生を会社に御足労願い、昔通り稽古を続けて戴いている事はこの上ない喜びである。

謡曲雑感

旧制
五回生　西尾雄一

謡曲の功徳については色々挙げられているが、私には何と云っても頭の切り替えになる点に於て最も適当だと思っている。最近の週刊誌によると〝頭をよくする方法〟として頭の切り替えをはかる事がよいと教えている。ゴルフもよいそうであるが金と時間のない我々の様なものには縁のない話で、たとえ夜の二、三十分ほどでも一人で無心になれると云う事は非常にありがたい事である。更に謡曲の文章は寄せ集め文学とけなされるが、平常国文の古典等に接する事の少い我々には非常に面白い。佐藤春夫氏の〝極楽から来た〟にも一寸触れてあったが、藤原定家と式子内親王との、悲恋物語等謡曲「定家」と照合すると、興味がある。小説に寄れば式子内親王は法然上人の導きにより、極楽往生されたと云う事であるが、謡曲では執念物に扱って「定家」の霊「定家葛」となって親王の墓所にまつわり、共に邪婬の妄執になやまされるのであるが、ある旅僧の法華経役僧喩品の読誦により救われるとの解釈をとっている。その他歌舞伎等でも謡曲に取材するものが多く、面白い。

謡曲の稽古には能を観る事が必要である。能は謡、形（型）、囃子が渾然一体となって、演ぜられなければならない。従って素謡の場合でも能の所作を考えずして謡う事は無理である。又能は世阿弥も云っている如く「幽玄」を旨とする。従ってすべての所作が象徴的になり、見ていて非常に退屈なものであるが、ジャン・ルイ・バローも評している如く、新しい演劇の一つのいき方として興味深いものがある。

幸に能楽友の会では比較的安い費用で又短い時間で、いい演能を鑑賞する事が出来るから、未だ入会されていない方は是非一見される事を奨めます。

私の在学当時では、大学能楽連盟でも、神戸商大、大阪商大、関学、関大の四校のみで、せいぜい番囃子程度より出来なかったが、最近では加盟校もふえ、中には能、狂言も演ぜられ、非常に盛会だと聞いて喜んでいます。凌霜誌によると、東京方面では同窓生の謡会が時々催されているとの事ですが、関西でも神大風謡会を中心にして、集まりを持ちたいと思う次第です。

以上

雑感

学十四回　松田幸次郎

1

ものをかけと頼まれたのは卒業以来始めてである。こんなにむつかしいものとは思わなかった。印刷の仕事をしている関係上、得意先に原稿を急がせて、なんだこんなもの書くのに何日かけているのだろうと簡単に考えていたのに、さて自分で書き始めてみると仲々左様にはまいらぬのには驚いている。

ああ書いてみようか、こう書いてみようかと考え乍ら、予定の締切日が近づき編集諸子の顔を想像するだけで肩が重くなり、エイッ何にでもなれと書き始めた。

まだ今までに何の基礎的な研究もしたこともない能謡曲の世界は自分にはまことに未知の世界であると云っても過言ではないだろう。ただ歌美的な言辞、幽玄と云われるムード、炯爛たる能衣裳にひかれるまま謡曲をうなり出した学生の時の純粋な気持は一向に変ることなく、既に二十年近くが経ってしまった。まるで盲人が象をなでる感である。別に解らなければならぬという義務感がないのがこの無残な態度にあらしめて、頑として恥じないのかもしれない。

いづれにしても、謡曲の文章の美しさにひかれるのはこの世界に引き込まれる一つの大きな要因であろう。この美麗な文章を推敲した昔の先達は正に世紀の大詩人であらねばならない。初番物の壮厳さ、二番物の武者振り、三番物の花やかさ、四番物のくるい、いづれを読んでも一つの法則らしきものに展開された。文章の美しさは、本当にこれらを書き上げた先人達の苦労の程を偲ばすに充分である。ものを書くむつかしさである。

2

体験上の事で恐縮であるが、卒業以来小さな事業を続けている。資本の蓄積を強行すれば、労組の結成、或いは国税査察の御入来とテンポがくるい勝ちになり、売上を増そうとすれば債権回収にストップがかかり、もう払えませんとくる。世の中はそう上手にかせがせてくれないものだと分ったときは、鬢に白いものが出てきている。それでも折角信頼されてついて来た従業員や、引っぱって来てもらえた仕入先、得意先の事を思えば、一歩たりとも引けぬ気持にかりたてられて、少しでもまともな組織に、企業体に、と創ることのむつかしを感じている。

能の幽玄のムードは一挙に出来上ったものでないにしろ、猿楽以来の一貫した幽玄は時代を経るにつれて磨きに磨かれたムードになって数百年間消え去らずに伝えられた。神を真近に感じさせ、閻浮妄執の場に引きづり込み、汐汲みに波の音をききとらせ、三井寺の鐘の音をきき分けさせるこれらのムードはやはりつくり出されたものである以上、むつかしいものだったろうなあと純粋に考えさせる。ものを創るむつかしさである。

3

自分の事ばかりで恐縮であるが、仕事に疲れた時、一人でよく映画を見、音楽を聞く。それらの底に流れているらしきものを自己流に解釈して、さて新聞等の批評欄を読んだとき、全く違った批判がのっているを見て、ガッカリする事がよくあった。

しかし、自己流の解釈法は、別にガッカリする事もない。それでよいのだとそれを又自己判断する事にしている。主観に自信をもつ様になったのでなくて、主観の遊戯に満足しているのであろう。

能楽を時々観に行っても、先達の批評の解釈を無理にこじつけて自己のものにしていたのでは、苦しさがあって楽しさがなかった。えいままよと自己のうちらで解釈して、ものの底に流れているものをみつめてみると、案外面白いのでなかろうかと思っている。

確かに、謡曲を書いたむつかしさはあったであろうし、能楽のムードを創ったむつかしさは大変であったであろう。自分はこれらのむつかしさ追ってゆくよりも、先人の創ってくれたこの果実を、自己流に味って明日の糧にしてゆきたいと考えている。ものを観るたしさであろう。

思い出すまま

和田慎三

昨年末現役の松岡さんがわざわざ銀行へお越しになり、何でも良いから風諧会誌に書いてくれとの事で、頼まれたら断わることの出来ない人の良さ、アッサリ引受けたものの、年末の慌しさに机の抽出しにしまい込んで忘れておりました。

まずは宇治正夫先生、藤井先生はじめ風韻会の皆様も相変らず至極お元気に斯道に御精進の由承り大慶至極に存じます。久方振りに先生方、先輩、同僚の消息を聞き、誠に懐しくしばし仕事を忘れて当時の思い出に浸ったことでした。

私が謡曲を初めた動機と言ったものを振返って見ますと、①父親が九つの年から四十九で死ぬまで熱心に謡曲をやっていたため、子供の頃から雰囲気に慣れていたこと。②中学生の頃から歌舞伎、文楽の鑑賞が好きで、自分でも何かやりたいが、できるだけ簡素で質実なものが良いと思ったことなど、極めて現実的で安直な考え方であったのです。私が謡曲部へ入った頃は昭和二十六年で当時は二十二回の上原元典氏（住友銀行福島支店）二十三回の保坂君などが実力者で同僚の滝野晋君（日本銀行神戸支店）と二人でおそるおそる入門しました。

宇治先生は見たところこわそうで、大きな声でしたので、最初は先生の前に出ると、どうしても思う様に声が出ず、情ない思いをしました。しかし日が経ち、稽古が進むにつれて、下手は下手なりに精一杯の声を出すようになり、また宇治先生の厳格にしてしかも細い所へ良く気を配って戴く極めて御親切な御指導によって、だんだん熱が入り興味が沸いて来ました。そしておこがましくもその年の十二月には先生の御好意により湊川の舞台で「小袖曽我」の五郎（ツレ）をやらして戴きました。何しろ初めて舞台に出て皆様に聞いてもらうのですから、その気遣いは大変で、紋付の着方、扇の持ち方、舞台へ出るまでも、出てからも落着きませんでした。殊に「飛ぶ火の野守」の中音が仲々出ず、家に帰っても、道を歩きながらも、銭湯の中でも片言のようにややノイローゼ気味に練習したことを覚えています。もっとも宇治先生は「細かい節回しや勿体ぶった謡い方を避けて、学生諸君殊に若い人は力一杯腹の底から立派な声を出せばよろしい。僅かな節の間違いは気にしなくて良い」との指導方針で、結局このやり方が謡の精神を生かしたものだと今でも感服しております。

謡曲の良さについては、既に多くの人が色々の見地から述べており、むつかしい味わい方もあると思いますが、私にはそんなことは二の次です。私の場合結局謡曲が好きで、別に人に聞かせるわけでもなく、一人で謡っていると、自然ほかのすべてのことが脳裡から去り、その間、曲の時代に遊び、曲の良さに酔い、精神を一つにまとめることができます。学生時代に「卒業論文」が行詰ったとき、しばらく何もかも忘れて、謡曲に興じて再び机に向うとまた新しい構想が浮ぶことがしばしばでした。また就職してからも、色々気詰りな時、嫌な時には謡いますと、いつの間にか気分が爽快になり、

にこやかな気持で翌日の仕事に励むことができます。

最近仕事が非常に忙しく謡う暇もだんだん少くなり、この頃では月に一度程度しかやりません。宇治先生は「忙しければ忙しい程、謡を謡って気持の余裕を作って下さい」とよく言われましたが、この言葉を忘れず、この文章を書いたのを機会に、できる限り謡を謡って忙中の閑を楽しみ、よりよい仕事や生活の糧にしたいと思っております。皆様の御指導と御鞭撻をお願い申し上げます。

まことに取りとめのないことを思い出すまま雑文に卓しました。風諧会の益々の御発展を祈り上げます。

（住友銀行調査部勤務）

大阪市大能楽研究会

村岡竜馬

此度、貴会の機関誌が発刊される運びとなりましたことを、先ず以て、心より御慶び申上ます。

サークルという様々な個性の集まりが、単なる雑多な集団としての存在から、一つの異質の性格（つまりはチーム・カラーとでもいうものでしょうが）を滲み出させる為には、色々な方法が考えられるのですけれども、機関誌を出すということは、一つは、現在の活動状態に於けるクラブのあり方に対する省察と、それから引出される将来への展望という試みに、必ず何らかの効果をもたらすものと思われます。

市大能研に於いても過去四回、部誌を発刊して来ましたが、まだまだ雑文集の域を出ず、常に問題意識の欠除が反省されています。これには、部誌の内容を先輩及現役部員相互間の談論・放言の場でよいという考え方と、各号毎に一つのテーマを設定し、意見の集中統一を計ろうという考え方とがあって、その決着がつかぬまま、編集技術上の制約もあって、中途半端なままの実状となっているからです。雑誌の内容としては、後者の方針による方がより高度であることは当然ですけれども、あまり原稿に注文をつけることは、部誌本来の目的である自由な発言の場に何か固苦しさが生ずることは否定できません。先ずテーマを設定すること自体が難しく、誰もがそのテーマに対して関心を抱き、且つ、自分の意見を積極的に述べるだけの刺戟を与え得る様なものでなければならないからです。

我々の場合、雑多な原稿の中には、非常に興味あるテーマを含んだ原稿が出されることがあります。この場合、そのテーマに関して議論が次の号にまで持越されるということは先ずないのですが、部員がその記事を読み、部室に於ける話合のテーマとなって反応を生めば、そのテーマの提起は、決して、不毛であったとはいえないと思います。

部員の中からの問題提起の場として、機関誌は右の様な意義乃至効用を持つのではないかと考えるのですが、このことから日常のクラブ活動に於いても部員間の話合の機会を出来るだけ持つことの必要性も、強く認識されねばならないのではないでしょうか。

クラブ―能楽研究会としての―の運営とは、要するに趣味を同じ

くする者の集まりが、個人的な接触を通じて、一つの有機的組織体として活動し、質的に高度なものを生み出して行くこと（甚だ舌足らずの表現ですが）と、考えます。クラブの活動内容に、クラブの本質を探ってみます。謡曲、仕舞のクラブといえば、例えば運動のクラブの様に、対象物を唯一限定的なものに限っていません。尤も、謡曲と仕舞とが、当面の活動対象ですけれども、謡曲、仕舞はその上位に囃子、更には能楽という古典芸術を持っており、能楽そのものに対する関心なしに、謡曲、仕舞を究極の目標として把える訳には行きません。

現実活動に於いては、学生のクラブとしての種々の制約を受つけつも、演能という最高の活動形態をとっている学校も多く存在しています。しかし、学生が演能に至るまでの、無類の技術上、財政上の困難さは、改めて述べるまでもなく、動かない事実です。ここに、我々が、謡曲、仕舞、或は囃子程度を対象物として（せざるを得ず）、それ以上に、容易に発展し得ないクラブのジレンマがあります。仮りに、部員の中に、非常に意欲的、且つ、優れた技術を持っている者があったとしても、それだけでは、学生としての能は演ぜられるものではありません。クラブが集団として存在しながら、しかも異質的な組織体として動き得るためには、一部の者の自己満足的な機関であっては、クラブ本来の意義は失われざるを得ません。

我々能研部員が、常にクラブの発展について話合う時、種々な具体案が提出されます。例えば、練習方法、先輩、外部団体との接触、能楽へのアプローチ、機関誌の内容等々。その中で、可能なことは実行に移しています。我々は、この過程即ち、常に部員全体の話合いから活動が生み出されて来ることこそ、能研のクラブとしてのあり方であり、つまりは、クラブ一般のあり方であろうと考えています。

他方、活動対象である謡曲、仕舞の技術的な訓練の重要性は、改めて説くまでもなく、これこそ部員互いをつなぐ絆です。練習を通してこそ、連帯意識が生れるのであり、結束が生じます。

我々は、クラブ活動を、練習と話合という二元的な立場で把え、活動対象と不即不離の関係にある集団的な場に於ける個々の交流こそ第一義的なことであると思うのです。

以上

謡雑感

大角征矢

この稿の為に神大風韻会の松岡君に度重さる御足労をかけ御迷惑であった事を最初に深く御わびいたします。一日二十四時間は限定されており、自分の身であるのか他人の身であるかと考える程の中でめまぐるしい多忙の渦中に巻きこまれると、どうしても目先の問題にまづ解決を追られついつい今まで延び延びとなりました事、重ねて私の怠慢をお許し下さい。

宇治先生に対しましても近頃の私の不熱心に就きまして、おこがましくもその決して本意でない事をここより申し上げ、稽古をかわらずおつけ下さいます様御願い申し上げる次第であります。

私が謡なるものをその終生の趣味としてとりあげようと決心しましたのは、私が神大風韻会に入部しました昭和二十七年（と記憶しております）の秋、大学の講堂で秋季大会が催された時の記憶によってであります。私はその年の春、単身入部いたしまして今も学生諸君がやっておられるであろう様に、あのなつかしい集会所で後頭部のジーンとしてくる様な感じを味わいつつ、めったやたらにうなりつづけたのであります。それまでは私の謡に関する知識は全くの白紙でありまして、今も交友を続けております友人と音楽会に行っては、又ラジオを聞いてはブラームスを論じフランクの室内楽に舌戦をたたかわしておりました。たまたま大学の門を入ったところの掲示板に「謡曲部入部歓迎」を見出しその足で集会所に行くなり当時の謡曲部幹事の和田、保坂の諸先輩より歓迎を受け、続けようという気になったのであります。その秋に催された大会は、藤井先生の「礒」、柚木先生の「勧進帳」、佐野先生の「蟬丸」、古林先生の「俊寛」といった大物をはじめ、「松風」「三井寺」等の大曲がずらりと並び壮観を極めたものでありました。（残念ながら当時の番組が手もとにありませんので―あればここに掲載して記念にとどめておきたいと思ったのですが―）

前述の様に、春に入部してその秋の事でありますから、その全容を大局的にみる力が私にはとてもありませんでしたが、「礒」における「古里の軒端の松も心せよ」以下の一段に至って謡本をみつめて思わずジーンとくるものを感じ、「勧進帳」におけるワキとの掛合の峻烈さにかくこそと感得し、「松風」におけるキリの抑揚自在の流麗さに羨望の念を禁じ得ず、憑かれたものの様に一日を返った記憶は今に連帰し、たえずそれを更改し螺旋状に拡大していく事が私の稽古の内に太いバックボーンとして存在して居るのであります。

「稽古事」というと古めかしい封建性を連想する人があれば、その人はその本質を見誤って居るものと考えます。数年前ヴイオリンの諏訪根自子はその師モギレフスキイの死をいたみ「欧州中を歩き廻ってもモギレフスキイ先生の様なよい先生はありませんでした」と新聞に書いておりましたが、私はこの言葉が忘れられません。これこそ師と弟子とのあるべき姿であると思っております。と同時に藤井先生がよく云っておられる――自分は専攻の学問に関しては一城の主ともいうべく上から押えられるものがない、自然人間的にもそのあらわれの生ずるのを恐れるが謡のおかげで人間的修養がつまれるのは有難いことである――といった意味の事も深く私の心裡に焼付いております。稽古について具体的に申せば私が入部していくばくも月日が経たぬ頃、楠町の稽古場に先輩と共に毎週行っておりました時は、さる婦人が「山姥」のおさらいを受けておりましたがそのうち例のクセの「一念化生の鬼女となって」の甲グリで何度と

なくやり直された事、又ある年輩の人が「三井寺」の「子の行方をも白糸の」でコーとのばして次の「の」に至る過程がいけないとこれも数度といわず直された事、これについては、狂女である、ダレてはいけない、緩急をつける、従ってコーとのばして「の」を小さく短かく「ゆくへ」まで一気に謡い次の「へ」の廻しを大きく、といくら云われても云われる程、「の」を意識してしまうわけです。そう云われて師の謡われるのを聞くといかにも子を慕い求める気持が深くこもって居る事を感じとるのであります。又私自身「錦木」の稽古の時クリ前のシテ、ツレの掛合をうけて地が「きりはたりちやうきりはたりちやう」とつづけるところでキをのばしリを更にウカシ、ハタリのリで下とするわけですが、リとハの間で力が抜けておると云われ、顔を真赤にして力んでやっても、ますますハがとってつけた様な謡い方になりどう謡ってよいのかわからなくなった事を憶えております。こう云った個々の事柄は、その個所だけ気にとめてよく謡えてもその精神が全曲を貫いていなければならないという事が重要であると考えます。すなわち全曲を貫く力という事であると考えます。野口兼資著「黒門町芸話」には仕舞で指の先まで力が入っていなければならないと教えて居られますが、全くその通りなのですが、意あって力足らずというのが私共稽古する身のなげきであります。一にも力、二にも力、その基礎の上にはじめて節の技巧、抑揚の自在が生ずるのであろうと考えます。師のおかげで舞囃子を七、八番舞はせていただきましたが、その都度楽しさと苦しさとはがゆさの交錯した気持を味わいつつ結構楽しいと思うのはつまりは素人の悲しさというところでしょう。

しかしこの様にして蓄積される経験は私としては替えがたいものであると感得し、この道に入った事を喜び、現在までの師の教えは謡一般の外に人生教訓にまで大きな影響を受け、これを感謝しておる次第であります。現在仕事に忙殺され週一度の稽古にも遠ざかっておる事は私としては全く痛恨事であり、何とか余暇をみいだそうと努めておるのですが、はじめにも申した様な次第で心ならずも先生には失礼の数々を重ねておるわけです。神大風韻会よりも会の都度御案内をいただいており乍ら、十に一つも出席出来なくて誠に申訳なく思って居ります。

現在の盛んな神戸大学風韻会の益々発展される事を切望いたします。ここに私の思いつくままのつたない感想文を掲載いただける機会にもう一度私の謡の趣味を終生続ける事を自身に確認いたし、現役学生諸君にもそれをおすすめしたいと思います。最後に之は私自身の考えのみならず或先輩からも同様の感想を聞いたのでありますが、謡と洋楽とは一致するという事、いかなる点に於いてと反問される洋楽を好まれる方の宿題としておきたいと思います。

昭和三十五年二月記

（新制二回E）

能の理解のために

牧　千　雄

能楽と云う芸術が、中世封建社会を基盤にして誕生し、禅宗や武士道等と云う世界観に育てられながら今日迄発展して来た事実は、能を理解するためには、何よりも大切なことと考えます。芸術としての能が、どの様な美しさを備えているかを知るためにも、また、将来能がどの様に生きていくべきかを議論する場合でも、これは重要なことであります。その理由は極めて簡単で、能が、謂はば、心で表現する芸術だからであります。能の心はいろいろ研究家が解明しておりますが、要するに、腰は曲っていなくても老女の心を以て演ずれば、老女の表現が出来るはずであると云う様な、一種の哲学的な説明がなし得るのではないかと考えます。中世と云う時代は、政治的にも経済的にも一種の混乱の時代でありまして、荘園制度の崩壊と武士階級の抬頭と云う社会現象を通じて、古い律令体制国家が、次第に変化を来した時代であります。この様な時代にあって、人々は武士階級の支配下での新しい社会のモラルと、禅宗の影響による新しい世界観との確立を要求されていたと云えましょう。この時代の人々が、何を考えて、何を美しいものと観て生きていたかは中世のいろいろな芸術、例えば仏像彫刻にしても、和歌にしても文学にしても、それらをみることによって明かになるのであります。即ち、万葉の時代の様に、簡明直載な人間の表現でもなく、古代末期の様に嬢々たる美の表現でもなく、更には近世の江戸文学や舞台芸術にみられる底抜けの庶民性でもない、もっと力強く、しかも簡素で、且つ、人間性のあふれた、芸術を要求する人々が多かったわけです。世阿弥の云う物真似の真意も、鎌倉時代から室町時代に至る写実主義の現れであったでしょうし、簡素な能の表現も禅宗的な、美しさの突きつめ方から出たものと考えられます。

ただ、誤解してはならないのは、現在の能は、世阿弥当初から、今の様な形であったのでもなく、能の美学とか、能のあり方等と云うものも、当初から確立されていたのではないと云うことです。それは、これら中世的な、あまりにも中世的なものを母胎として、歴史的な発展を遂げながら、今日の形に成長して来たとみるべきであります。

そこで、心で表現する芸術である能が、今日、生きるためには、やはり、心を中世の人々の様に働かせ得る人々によって支えられなければならないかどうかと云うことになります。これは、古典を支えるための問題としてすべての古典芸術に通用することでありますが、特に能を対象にして考えてみた場合はどうでありましょか、現在と云う複雑怪奇な世界に生きる人々は、中世の人々の心や心の持ち方を理解できないか、若くは理解出来ても、生活の基盤が異る以上、同じ心の持ち方をすることは、まず不可能であります。しかし、それだからと云って、能が現代に生きることは、不可能であると断言するのは早計であります。能の心、或は能に於て表現しようとしている心と云うのは、よく考えてみると、極めて至純な形の心

のあり方であって、人間の心の底にある、いわば、単純で、純粋な心の形である様に思います。それが、新劇や、抽象絵画の美の心とはちがった質をもっており、それ故に、能の簡素な表現も可能になると考えられるのです。新劇などの美しさの現し方は同じ舞台芸術であっても、複雑な表情や、こみ入った筋書、手のこんだ演出法で、しかも人間の苦悩、それも義理人情の裏の裏や、極言まで追いつめられた赤裸々な人間を表現しようとしますが、能では、そうではありません。藤戸にしても隅田川にしても、母親の子を思う心が、極めて単純に、それ以上のものでも、それ以下のものでもなく表現され、しかも、その単純さの故にこそ、何のバックも複雑な装置もない板敷の舞台の上で、この上なく美しいものが展開されるのです。いわばきわめて素直に、簡明に人間の心の底を表現しようとしているわけです。祝言の能といわれる一群の能は、理論も理窟も越えて、東洋的な喜びを表現しています。

ところで問題は、現代にどのようにして能が生きられるかと云うことです。心の底の単純且純粋な形を表現するのが能であれば、その心のつきつめ方は、必ずしも中世的な方法によらなくても可能なはずです。現代人は現代人としての心をもちながら、その立場から自らの心の底をつきつめてゆくべきであります。機械文明に追いまくられながら生きてゆく現代の人々の心は、常に人間を見失なうまいとして努力をしていますが、その求めているものをつめてゆけば、やはり人間本来の心のあり方、心の底の単純且、純粋な形にゆきつくはずであって、それは中世の人々が荘園制度の崩壊と武士の抬頭の中にあって、常に求めていた人間のあり方、心の持ち方と少しも異らないものであろうと思うのです。それこそは人間本来の姿、云いかえれば人間性と云うものであり、あるがままの簡明な人間の心でありましょう。

そこで、今度は、つきつめて得た心の表現の方法でありますが、能に関する限り、能の表現の方法は、最も洗練されたものであり、六百年の風雨にさらされた技術と技巧は、極めて簡素な方法でありながら、またそれ故につきつめた心の表現には、最適なものであります。漁師も天人も同じ様な絹の豪華な衣裳をつけて演ずる今日の能は、祝言の心と人間の浅ましさ、女性のたをやかさ等を、つきつめた形で、美しく昇華させる最高の技術をもっていると云わねばなりますまい。

もう一つ、述べなければならないことは、能の修練であります。能は、六百年の伝統の中に、武士道や禅宗の影響を受けて、その修練をきわめてきびしい方法に育てあげています。この修練は、実は、技術の修得であるとともに、心をつきつきた形で捉える方法であることを理解すべきであります。現代の人々は、この様な方法で物事を会得するのは不得手であって、すべて演繹的に解決を図るのが得意であります。そのことのよしあしは別にして、とにかく、現代まで育てられて来た修練の方法は、心をつきつめるには極めて迂遠な様でありながら、しかも効果は最大であることを理解すべきであります。ここに、能が現代に生きる一つのむつかしさがあると云えます。しかし、修練の方法、心のつきつめ方の過程は如何様にあろうと、つきつめた心の単純且至純な形は、現代の人々と云えども到達し得ないことはないはずであります。何となれば、既に述べた

様に人間の本来の姿がそこにあるからであり、それは時代によって異るものではないからであります。

ただ、注意を要するのは、武士道や禅宗によって影響され、中世の人々の心から出発している能の修練には、しばしば、それからの世界観から出発するモラルが、形の上で要求されることであります。いくつかの習慣や、能を修練するものに特有の作法、いってみれば近頃の十七才クラスからは封建的とたった一言で片付けられそうないろいろな仕来り、それらは、すべて心をつきつめる一つの方法としての意味を現代ではもっているのであって中世から近世へかけての能の発展に伴って附加されたものであります。これからの習慣や作法は、能の心を理解するには、歴史的背景として重視すべきであり、可能な限り実践すべきではありましょうが、能が現代に生きるためには、それに加えて、現代人らしい心のつきつめ方、それによって得た単純且至純な心の格調正しい表現が更に要求されるべきであります。

能が室町時代に生れ、安土桃山時代から江戸時代にかけて育ったと云う事実は、能を古典であらしめ、価値あるものにしたと同時に現代に於て更に新しい理解のされ方を要求しています。一つの完成された古典としてみるときは、単に素晴しいものであっても、それを時代とともに成長させてゆくのは容易ではありません。そこには具体的な問題、例えば家元制度だとか、観賞の場所や出演家の組織の問題等があります。その様な問題もさることながら、やはり現代に於て能を育てるには、能の心を理解しようとする努力が最も必要であると考えるのです。

（新制四回生）

日本民族と能

永田守男

（一）

私達が教養を養う場合いわゆる象徴としての芸術と言うものが大きな役割を演じると思います。即ち芸術は人間の倫理的情操を養う場合に役立つからです。芸術に親しむと言うことはそれ自体非常にすばらしいことでありますし、同時にそれだけで倫理的人間としての道は大半開けたものと言えましょう。私達は人生を学ぶと言っても、己れ自身ですべてを経験することは不可能です。だからその補いとして芸術、特に文芸に親しむようになるのは当然の理と言えましょう。そして芸術（文芸）を通じて生きた倫理を学ばねばならないのです。

かかる一面から見ただけでも芸術に親しむと言うことが如何に我々人間にとって有益なものであるかおわかりだと思います。

別に私が所属しているクラブが風韻会だから宣伝するわけではありませんが、（むろん他の文化クラブにも適合することです）謡曲と言うものが人間形成に役立つと言うことは両手を上げて私は賛成したいのです。

（二）

そこで、私は能も又一つの立派な民族芸術であると同時に民族精

神であると見たいのです。精神哲学には絶対精神、世界精神、民族精神がありますが、かかる精神哲学はヘーゲルにその面をみることが出来ます。（しかし私がここで書くことはかならずしもヘーゲルの言うそれとは一致しないと思います。）

私は民族精神こそ国家の基体であると考えます、即ち歴史的に見た場合ヘーゲルに言わせれば国家は理性的なものであり法によって組織されたもので、かかる点からみれば国家であり、他方変らぬ基体の面から見た場合そこには民族があるのです。しかし民族は人間集団であり、この民族を民族精神として見た場合にはそれが精神である以上当然に自覚をもって何らかの程度において自己の活動を統制しうるようないわゆる主体化されたものを意味すると見たいのです。

ヘーゲルはこの民族精神を宗教の面から切りはなして解決しえなかったようです。たしかに民族精神は宗教と密接な関係がありましたし、私がこれからのべようとする能楽においてもその例外ではなかったようです。

能楽の中に流れる精神（これを私は霊とみたいのです。）日本個有のものであり、その泉はとうとうとして民族精神の中にそそぎこんでいるのです。

（三）

芸術の創作は哲学とは言えないでしょう。しかし芸術的創作にあたっては創作をする能力の動力因とも言うべき原因が必要であるし、又これが目的をもってその目的をはたすために動くとすればそこに目的因とも言うべきものが存在すると思います。

能にあっては霊（精神）が第一義的な動力因と言えるでしょう。人間の体にたとえるなら、ちょうど我々が何かの目的で行動しようとする時、手は手、足は足の運動をその目的達成のために統制するわけです。この時私達の身体は目的達成のための一つの材料にしかすぎないのです。それと同じように、霊（精神）は能そのものの中にあるものであり、即ち人間に対する神のごとき存在であるのです。そして又、能は人間の身体にたとえられるわけです。

したがって能にあっては能の中にある霊（精神）の目的達成のための手段にしかすぎないのです。その目的は何かと言われますと幽玄とでも答えざるをえないでしょう。しかし私はもっと表面的なもののみを問題にしてみますと、それは簡素とでも言いえましょうか。即ちこの簡素を第二義的な目的因と見たいのです。

（四）

或る書に次のようなことが書かれてありました。

「多くの花を犠牲にして、ただ一輪の花に美しさをあつめることはより印象を深くし、より効果的である。この行き方は日本人的であり日本の芸術はみなこの傾向が強い。」むろんこれは茶の湯に関する一節ですが、能と茶の湯との共通点をここに見とめることが出来ないでしょうか。即ち表現の節約（簡素化）が多く喜ばれたと言えるでしょう。

我々日本人の祖先は非常に簡素を好みました、そしてその簡素化をもって自由に自己の活動を統制し、主体化して来たのです。その一面として能が田楽、猿楽から進み、世阿弥観阿弥によって大成されたのです。

能の表現の簡素化から当時の質実剛献な武士の気質がうかがえるような気がするのです。特に時代とともに質実剛献の面が武士から失せて行ったことから考えれば、能からうかがえるこのような面は特筆に値いすると思われるのです。

もっともこのようなことは田楽、猿楽が農村階級のものであり、武士が農村から起って来たものであると言う事実からして、能がそのようなものを起線とする以上当然すぎるほど当然なものと言えるかもしれません。だから能の簡素化と言う面を見た場合かかる下層階級即ち我国民族の基盤である農村からその起源をみたと言うことは能をして一層民族芸術たる色彩を濃厚にするものと言えましょう。それに我国ほど風雅な感情が豊富かつ多様に栄えた国は諸外国にもあまり例をみないのです。特に芸術の分野においては自然が多く材料とされている様ですが、その原因として我国の自然の美しさ以外に自然と人生とを同一視する我国の国民感情を無視しえないと思います。と言いますのも古来「月にむら雲、花に風」と良く言われます様に、その底には自然のうつろいやすさ、はかなさ「諸行無常」から人生の不幸不運を理由づけると言う動機があったとも言えましょう。能の場合でも右のような場合に特に好んで自然描写を行なっているようです。（むろん例外も多く見うけられますが、そのような場合が多々あると言うのです）

（五）

一方、芸術の研究においては二つの面があると思います。一つは美術史であり、今一つは「歴史としての芸術」であると思います。

芸術は一国の文化の進歩とともに、時々に変化しうるものであり、かかる過程において時々に変り行く思想、感情を表現したものと言えましょう。

能においても、その時代の変遷にともなって変化があったでありましょう、しかし、江戸の元禄時代、あの放逸濫費の幻想の時期を通って来たにもかかわらず、我国の民族精神とも言うべき簡素の面を失なわなかったと言うことは、我々に何かの問題をなげかけて来れるのではないでしょうか。

むろん、そこでは江戸時代に能楽が将軍及び皇室のおかかえものとして存在しており、武士階級のものとされていた事実を考慮しなくてはなりません。

最後に私達が「歴史における芸術」を正しく理解すると言うことがいかに大切であるかと言いますと、正しく理解すると言うことは、その法則〈芸術の中にある法則〉の盲目的な遂行でも、方法の規範の独断的な追求でもないと思います。即ち芸術と人生との深いつながり、思想的に高度の芸術をめざして、我国の伝統芸術に積極的に援助し、自己の創造においても正しい道を選び、庶民（国民）に理解されるものにすると同時に常にその中において前進的なものをみつけ出すことであると思います。ですから「歴史における芸術」としての能を理解することが、当面の私達に課せられた大きな任務と言えるでしょう。

参考文献

哲学入門　田辺元著　筑摩書房
世界史における日本　G・B・サンソン著　岩波新書
日本人の心理　南博著　岩波新書
能楽入門　三宅寑著　岩波書店

（新制十回J）

能と現代

里井三千雄

毎日多忙なビジネスに追われていると、つい心の余裕を失いがちになる。特に現代は所謂技術革新の時代であって仕事の機械化合理化が行われ人間は機械に使われる様な状態で人間の独自性、創意工夫等が発揮される余地が狭小化している。併し人間として生きてゆく以上やはり主体性独創性が発揮されなければ存在の意義が無い。私はこの意味においても趣味を持つ事は良い事であり、又必要であるとも考えている。それは気分転換にもなると同時に趣味を通じて人間形成に寄与する所は少からぬものがあると考えるからである。私は月に一度は能を観る様にしているが、これは単に日本古典芸術の鑑賞するという外形的形相に止まらず、そこに自己について僅かな時間ではあるが、内省できる機会を持ち得るからである。

世上マス・コミとか伝達文明とか云われているが、結局は受動的、機械的人間の創造であって、其処には人間の能動的、積極的な働き、作用の範疇の狭隘化を現出せしめている。それは思素の欠如とも、或いは人間類型の規格化、平均化を持たらすとも結論されている。もしこれからを現代文明の疲幣と見るならば、現段階における自己復活或いは自己要求の必要性はより強調さるべきではなかろうか。

能は云う迄もなく、伝統的日本古典芸術の粋である。これを理解することは中々難しい。特に現代的な視点においてこれを解釈することは歴史的背景の理解の上に立ったより高次のものであるだけに、特に至難に思える。併し私達と同じ日本人が完成した芸術であることを思えば何らか共通性を有する理解の素地がある筈であると考えられ、これを灯として理解に近づくことはあながち牛角を咬むものとは云い切れぬであろう。私には素より能の歴史的考証研究を行う能力もなければ、又専門家でもない。併し現代に生きる人間の一人として、特に日本人として能芸術の中に種々の人間相を発見し、探求することは極めて興味あるものと考えている。私は芸術を鑑賞する態度には種々の立場があると思うが、私自身では特に人間心理の探求に重点を指向したいと思っている。能を現代の分析或いは感覚から観賞することは異端であるとの見方もあろうが、私はこれも一つの意義を持ち得ると信じている。

能は象徴芸術の色彩を有しているだけに人間心理との結合に時代を超えて共感し得る。基盤は却って広いとも云える。

謡の技術的巧拙を論ずるのも結構である。又古典的雰囲気を楽しむのも結構である。併し能を観賞することによって、現代に生きる人としてそこに思素し人間像を抽出し、更にこれを批判し、その中に現代人の主体性を盛りこむことも意義あるのではなかろうか。かくて能楽観賞の内実もより充実したものになり得るであろう。

（新制四回J）

「誌上研究室」

〝あなたと一緒に考えましょう〟

「クラブ活動について」—謡曲部を中心に—

J九回生　松岡誠夫

一、はじめに

戦後の文化活動の動きの中に、クラブ活動は大きな比重を持って来ている。学校、職場、等々に於て、盛んにクラブ活動云々が論議されて来た。にも拘らず、未だにクラブ活動の沈滞、頽廃が言われている。立派な目的を規約にかかげながらも、何故に沈滞するのか。今一度、皆様と共に考えて見たい。

二、クラブの目的

クラブ活動の目的は謡曲部を例にとるなら、殆んどの場合、謡曲の研究と部員の人格陶冶と云う二つの目的を明記している。同様に、どのクラブに於ても、その技術の研究と人格陶冶を目指している。

このこと自体は法と同様、正しいことであろうか、実際は規約によって動くものでない。クラブが自主的集団である以上、そこで楽しむことが出来なければ誰もクラブへは行くまい。しかしながら、この楽しむと云うことは、自由に規律がある如く、クラブの規律に拘束される。しからばこの規律はどこから来るか。勿論集団と云う性格からも来るが、根本的にはクラブの目的たる「人格陶冶」から来るのだと思う。謡曲技術如何は本質的な規律を生むものではない。それ故にこそ、上下の隔もなく楽しめるのである。

殊に学校に於けるクラブ活動は人格陶冶が主であると思う。従って謡曲は趣味として、人格陶冶なる目的の手段に過ぎないのである。

クラブの目的は人格陶冶にありと言い得るであろう。

三、クラブの運営

しからばクラブを如何に運営して行くか。クラブが自主的集団である以上、各個人がそれぞれに自覚を持たねばならない。

特にリーダーは次の事に注意せねばならない。

㈠謡曲を学びたいと云う要求を満足させるか否かと云う事。

この要求は個人によって異るが、学業との両立如何が問題になる。時間的配慮、練習内容等について絶えず心掛ねばならない。目的追求の第一条件であるから、各個人が満足できるように、部員相互で決定して行くことが必要である。

㈡クラブの人間関係である。

人間関係がスムーズにゆかないクラブは完全に沈滞する。目的はここに於て十分追求される。外部からの影響もさることながら、内部の力として、人間相互によって切磋琢磨される。クラブの親睦が重要視されるのはこれ故である。

㈢経験の交換である。

到次的目的なる技術の研究のために、注意せねばならないことである。謡曲を深く理解するために、互に経験を交換をし合わねばならない。交歓会も必要視されるのもこの故である。

四、結　論

以上三条件を簡単に述べたが、これはリーダーが注意するのはさることながら、各個人も十分に自覚しなければならない。

各人が人格陶冶を目指し、クラブ活動を楽しいものにしようと努力しなければならない。つまり、クラブが自主的集団であると云うクラブの生命の成立ちそのものに問題があるのである。

〃悪法も法なり〃と云う命題を打破るものが個人の良心以外にないと云われるのと同様、クラブの生命は各個人の自覚にあると思う。

第六回コンクールの感想

—十一人の山伏涙をのむ—

E九回生　福田好男

秋季大会は四年生にとっては、学生服で立派な舞台に座れる最後の大会である。我々十一人の四年生は前期試験が終ると信州に旅行し、鋭気を養うと共に団結を固めた。特に白根山で貴重な想い出を残した。コンクールの出し物を決めたのは学内の秋季大会が終った後の十月二十五日頃であったと記憶している。同時に我々はチーム・ワークを買われて宇治先生の会で安宅の同山に出ることになった。先生には懇切丁寧な指導を受け、拍子も教えていただいた。かくて十一人の山伏は立派に役目を果すことができ、我々は一層結束が強まった。十一月二〇日にこれが終るとコンクール曲「安達原」一本に打込んだわけである。拍子を解説して戴くとその精密さに感嘆し、同時に先生に対する畏敬の念の深まるのを覚えたものである。更に声を出すという日常茶飯事も芸術に高められるとかくも思い通りにならぬものかと、先生に注意される毎に途方に暮れたが、それは単に声の出し方でなく精神のもち方であり、声を鍛えると同時に精神力をも鍛えなければならないと思った。自分の趣味でやっている謡曲が単なる趣味でなく、人間の鍛錬にもなっていることを改めて実感したわけであるが、能楽が日本の伝統的芸術であることを思えば当然でもある。

かくて十二月四日、正法寺で二回練習を行い、勝算を胸に秘めて大阪能楽会館へ臨んだのである。コンクールの直前に神戸大学の仕舞が組まれていたので、慣れぬこととて着物をしまうのに手間どって、学生服を着て出てみると既に関学は終り市大が「賀茂」をやっていた。途中で外へ出て頭を冷やし心を静めるとやがて七番目、神戸大学である。座って目の前に宇治先生を想像しながら「げに恥かしや旅の」と始めた。ただ腹から力がぬけぬように心をくばりながら懸命に謡った十分近くはわずか数秒に思われた。全員全力を出したのだが、結果は四位。「思わぬ敵に落されて」その夜は二、三年生の出演した「蟬丸」を聞いて後、語り明かそうとて全員上野山君宅に行きお世話になった。

しかし物事は全て結果よりもそれに至る道程が大切である。如何なる至難事も達してしまえばそれまで、目標が大なれば大なるほど重要になるのは、それに至る道程であって、結果ではない、十一人が熱をこめて結束しあった事は非常なプラスになったと思う。もとより順位が目的ではなく、悔いるところはない。したがってコンクールに意義を求めるならば一層の努力と技能向上の促進剤としての役割をもつところにあるであろう。しかしコンクールをやる以上、すっきりした形で行うべきではないか。既に第六回目をかぞえながら依然人数、曲目、その他無制限であるのが現状である。これらをどう秤量して採点されているのであろうか。沼艸雨氏の講評自体それにふれていてそれ以外の何物でもない。曰く、実力伯仲でしっかりやれている。人数とか曲目の難易を考慮した、本の有無も考えた

等。それ位の事は我々にもわかる。しかし具体的にどこをどう採点したのか、そこが知りたいのである。以って我々の参考の資料とすべき言葉は、舞台の出方に対する注意を除いて、一言も論評の中に見出せなかった。いやしくも順位をつけるからには理由があるはずである。従って、今後曲目を課題曲と自由曲に分けるなり、人数を決めるなりして共通の土俵で競うことが望ましいと思う。更に会員数が増加すれば男女別にすることも可能になる。

ともあれ我々は学生生活の一環として謡曲に励みをもって人間完成の一契機とするものであって、芸術の深さを感じると共に人と人の協力の尊さを悟ることができれば充分である。合宿、旅行、及び不断の練習を通じて、いろいろな経験をすると共に友情を固め高めることができた。諸先輩からも激励を戴き有難うございました。コンクールには四位だったけれども専門課程進学後の二年程度の期間の練習では当然である。仮に入賞していたならば我々は人生を甘く見る事になるかも知れない。従って四位という微妙な順位を占める事によって将来によき教訓を得たと思っている。

後輩諸君の今後の一層の活躍を期待しながら感想文を終ることにする。

草津恋しや—嵐の中の白根越え—

（B9）　広瀬義弘

古今東西、旅を愛し、一生を旅に暮した人は数知れずあろう。旅の良さ、それは自然のかなでる音楽の美しさ、出雲美人、北陸美人に巡り会える楽しさ、否々、何物にもまして、後々になって顧る時、旅行中の遇然と遇然との巡り合わせのスリルに富んだ出来事の連続、自然の美しさ、厳しさ、はたまた旅の何処にか、かき捨てた恥までもがピンクのムード漂うお伽の国の出事の如く美化され、はるか現実を離れ、英雄たる自己中心の物語とし展開され、暫し世の憂き事どもを忘れ、忘我の境をさまよえることであると思う。数ケ月前、あの志賀高原の旅より帰りて安穏に暮す十一人の士もそのピンクのムードの中に展開せるお伽話をほろ苦い感じで回想していよう。

三十五年十月六日の早朝、あの寒空に、ルンペン族と駅ベンチで山崎（日興証券）の待つ長野駅到着より我々の旅は始まった。電車、バスを乗りついで着いた志賀高原の美しさは夜行でちくまぼけした我々の五体に感覚を呼びもどすに十分であった。京大ヒュッテで朝食後池めぐりへ。何の風の吹きまわしか、寒い寒いとトリス大瓶半分以上ちびりちびりと一時間たらずでなめた男がいる。東洋紡だ—めくら蛇に怖じず。何はともあれ空は快晴、まさは快適な出発であった。

十月七日、カーテンの隙間よりもれ出づる秋の世の景色？を楽しみつつ、また一幅の日本画を見る如く美しかった四十八池、大沼を回想しつつ旅の夢を結んだ京大ヒュッテを奈良女の一行（中に某君のこよなく好きし娘もいたという）に送られ、小雨降る中を白根越え草津へ向け出発した。山の怖ろしさ知らぬ十一人の士、しかも業界大手への就職を果した士の前には、十分後の世界を神ならぬ身の知る由もなく、愉快きわまりなき出発であった。熊の湯入口でバス下車。傘をさしての行軍だ。雨でぬかるんだ山路は極度に歩きづらい。小一時間、やっとのことで白根山ふもとのぞき小屋附近へのリフト乗場に着いた。一同昨日の態の湯—渋池の快適なリフト、須磨浦リフトを想い出して、内心喜こんだ事だろう。折から風雨やや強くなったようだった。タオルやビニールの風呂敷で頬かむり—異様ないでたちでリフトに傘さして乗る。最初の鉄塔をガタンと越えた。とたん雨風強く傘もろとも飛ばされそうになる。思わずリフトにしがみつき、傘を閉じた。ガスにかすんでいるが深い谷だ。足がすくむ思いだ。雨が冷たく、身に痛く感じられる。気温がぐんぐん下る。雨が顔にささるようだ。ビューンと雨もろとも風が谷底から巻上って来る。その度にリフトが左右に大きくゆれる。必死に一本の命の鉄棒にしがみつく我身の哀れさよ。ガス益々濃くなる。冷たい。前を行く山崎君の姿も消えうせた。さみしさに耐えかね、「オーイオーイ」と呼ぶ声もむなしく風に散果つ。ビュウーンと風の御見舞の来る毎に自分だけ落ちるのでないかと怖い、不安やるかたなし。何分過ぎたか、ガスのたれ幕の中で一人、血の気のなくなった手で必死に棒を握る自分に気づいた。あまりにも指の冷たさにそうっと口に入れ暖をとる。が出すや否や氷がはったようになり前にも増して指が痛い長い時間だなあ、せっかくの就職もオジャンかな？早く着きますように南無妙法蓮華経と唱えたり、ある君は歌を歌ったとか、ある君は生きたいと念じたとか、某君は東京の彼女の顔を想い出したそうないくつかの谷越え山越えストーブの赤々と燃えたつ工事小屋へやっとの思いでたどりつく。恥も外聞もなく裸になり、冷え切った体や、ぬれた衣服を乾しつつ、こもごもに語る心境、ただただ生きていた事を喜びつつこれから行く道の遠きをも忘れ、無心にクラッカーを食う。今日は帰れという小屋の人の言を聞かず、ただ、草津の湯を恋うる心のみ強く、強行軍へと出発したものだ。小一時間、またまた濡れるにまかせ、ただ辿らぬように、ある時は這いながら、或時は熊笹をつかみつつ進む。前を行く松本氏。突然、ステンノ.ところぶ。これを見て「アッ」と叫んだ福田君、ドシンところぶ、びっくりした小生もひっくり返る。三人共泥まみれだ。お互に「オーイオーイ」と声を交しつつ進む。雨が背中まで入込み、冷い。皆のまつ毛が白くこおっている。口びるは薄氷がはったようにつるりとしている。生れて始めての尊い？経験だ。歩く道々ガスを通して見える真紅に紅葉した木々の美しさはせめてもの疲れをいやすなぐさめである。路以外何も見えぬはかなさ。時々遅れている者を待つ間もほとんど冗談一つ出ぬ。ただ思いは草津恋しやである。小休止。出発。登りはよいが下りは怖い山路。何度も辷り、ころぶ。「左方万座温泉」「右白根山頂」の道標を横目に見てから二時間たらず。疲れた。頭がボケて来た。「あれが白根頂上や」と原君の声。黒々とした巨体目前に現る。あえぎあえぎ登

る。欲も得もなく寝ころびたくなる。家の畳が恋しい。草津や恋しい。土が、山肌が畳に見える。寝床に見えるヤァー頂上だ！大小様様の石が積上げてある。晴なればと思う折から、風雨益々強くなる。くすれる如く石に座る。昼飯だ。一せいにがぶりつく握飯、かんづめの馬肉のうまいこと。誰かが「この握り草津まで持って行こうや」と云出す。皆忠実に実行する。食後の記念撮影。近代科学の枠、エレクトロニックカメラもここでは用をなさず、暗すぎる。がたがたふるえつつ一秒、二・八でシャター切る。結果は不問不答だ。食後元気は出たが前にも増して寒い。早く早くと急いで出発。十一時半頃だった。五分、十分、道標を見失った。約半時間さ迷い歩く。依然として道しるべ見当らず。ガイドブック以外地図なし。皆の顔面に不安の影が差した。左は白根山の火口だという。ガスが次から次から山肌をかけ上って来る。十一人身を寄合って立ちつくす。視界二、三米。ただ風の音のみ耳をさす。何を思い出したか福田君が飛出し、ガスの中へ消える。いくら待てども帰らす。待つ身の長さ。皆して「フクダ！東洋紡」呼べどもむなし。「万座温泉へ行こ」「逆もどりしよう」「もうアカン遭難や」冗談ともつかぬ声。山崎君のほうかむりのビニールが切れて飛んだ……その時何やら狂気の如く叫ぶ福田君を見た。皆一斉に走る。「右白根火山山頂駅」皆の喜こびよう。松岡氏のかの笑いも聞ける。景気上昇？。互に握手、何かをわめき合う。…ありついたゴンドラの中で一発うなった組もあるとか。

殊勲者福田東洋紡に尊敬の念を払いつつ草津の湯を抱きしめる？。人心地ついたがオール風邪ひき。塩野義の威力発揮。かの握り飯のぽつねんと鎮座せる床の前で、今日一日を振返り、振返り語り合うこと夜半過ぎまで。

一夜明くれば快晴、恨みの白根、はるか上州三山を見つつ一路、浅間、軽井沢へと旅の足を速める。苦行を積んだ我々にとって、前後左右に浅間を見つつの軽井沢一周のサイクリングは旅行中最大のヒットであった。信州ソバの味も旅に風味を添えてくれた。条件反射反応の実験台の如きオヤジの居た上山田温泉、善光寺を後に十月九日「ちくま号」車上の人となり、木曽連山を車窓より見つつ、東京の彼女のもとに走った某君思う事しばし。

これら様々の出来事も今はただ、つゆと起きつゆと消えにし夢のまた夢の世の一椿事としか思えず、次の旅行の計画に余念のない我我〝旅のつばくろ〟ではある。

昭和三十五年度　風韻会活動総括

今年度の活動は桜の蕾がまだ堅かりし頃、即ち四月一日から春季練習会の名の下に六日まで、春霞みにうるむ六甲台部屋で初めたのでした。

では、今年の春から行なわれた風韻会の活動状況を順に御紹介することに致しましょう。

四　月

二十四日（日）晴奈良女子大学交歓会
　於　六甲台学生集会所
女子大との交歓会も今年で三年目、互いに勝手が知るようになって、打ち解けた雰囲気で終始なごやかに会が行なわれる。
会の後の校庭でのホークダンス、結構でした。
二十九日（金）晴　関西能楽連盟月並み会
　於　関西学院大学講堂
素謡　「嵐山」

五　月

一日（日）晴　三大学（旧三商大）交歓会
　於　天満宮能舞台（大阪）
素謡　「鞍馬天狗」　連吟　「田村キリ」
五番　仕舞
先輩の牧千雄（B4）　上竹原康宏（B7）　宇古直行（B8）亀井信男（B8）　三谷守雄（E8）の諸兄が参加された。
十三日（金）曇　開学記念祭出演
　於　六甲台講堂
連吟　「田村キリ」　仕舞　五番
学生一般にはやはり謡曲と言う古典的なしろ物は興味を引かないらしい。誠に残念な事である。
二十二日（日）晴　関学＝神戸商科大学交歓会招待出演
　於　関西学院大学講堂
素謡　「夜討曽我」
二十九日（日）晴　大規十三師古稀祝賀会参加
　於　大規能楽堂
神戸風韻会から有志、数名が参加す。

六　月

十一日（土）曇　関西学生能楽連盟春季大会
　於　神戸湊川神社
素謡　「小督」　仕舞　五番
十六日（木）小雨　神大風韻会春季大会

於　姫路分校

これは今年で二回目姫路分校の謡曲部と連絡が出来るようになってから行なわれたもので、これからも密接な連絡を取って行きたい。

安保斗争の最中、みなの気持は複雑。

十九日（日）　晴　神戸女子薬科大学交歓会

於　須磨栗岡舞台

今年が初めての交歓会、雰囲気が暖い感じ自然、謡も野郎達ばかりの時とは少々異って、謡にツヤがあるようだった。

きよう、新旧役員の引継ぎが行なわれた。

幹事は原敏郎（B9）から永田守男（J10）会計は福田好男（E9）から中島圭吾（E10）渉外及び学連委員代表は松岡誠夫（J9）から山口久之（E10）渉内は滝田恵一（E9）から山本閏一（E10）へと顔ぶれが変る。

七　月

九日（土）　晴　神大文化フェスティバル出演

於　神戸国際会館

連吟「熊野」

アンケートには謡曲について答えて来れた人々は少数しかおらず、ほとんどが「わからない」であった。しかし、他校の人から「良かった」と言われて気を良くする。

先輩の近藤康夫（E8）　中川格（B8）　亀井信男（B8）宇古直行（B8）　の諸兄がウイスキー二本ぶら下げて、応援に来て来れて感激、少々批評が厳しい。〈ウイスキーは合宿で飲んでしまいました。〉

十二日～十八日　夏期強化合宿

於　淡路島　洲本千福寺

通算参加人員は二十八名に達し、特に三日間参加された牧千雄（B4）先輩と最終日だけの参加でしたが、東京から参加してくださった長尾隆夫（B8）先輩を加えて愉快な合宿でした。

練習曲目は「鶴亀」「嵐山」「芦刈」「小袖曽我」「放下僧」「殺生石」「養老」「橋弁慶」・「清経」「鵜飼」「猩々」でした。

日課は七時起床～八時第一回練習、八時朝食、十時～十二時第二回練習、十二時昼食、四時～六時第三回練習、六時夕食、十時消灯。

この合宿はやたら偽名をつけることが流行し、まったく御上品で御座いました。

「合宿は字のごとく「宿」を一同に「合」するの意味なれば当然、そこには裸の人間としての接触が普段よりも一層強く現われ来るは必然の理と言えよう。この意味において、その目的がこの合宿で充分達せられたと信じる」（合宿の終りにあたって……）

十　月

十六日（日）　晴後雨　風韻会秋季大会

於　六甲台学生集会所

天気は夕方から崩れたが、会は盛会であった。参加された先輩は里井三千雄（J4）　牧千雄（B4）　林哲夫（E5）　青木岑生（B7）　大道一雄（E7）　宇古直行（B8）　中本善二郎（B8）　亀井信男（B8）それに会長の藤井茂教授、むろん宇治先生も御出席してくださいました。又コンパの時に走せ参じた中川格（B8）先輩等誠に多彩な顔ぶれに現役一同喜ぶ。

十一月

十三日（日）　晴　奈良女子大学交歓会

於　奈良東大寺本坊

連吟「安達ヶ原」素謡「殺生石」仕舞九番

初め当麻寺の予定が東大寺に変更されたのであるが、秋の奈良公園は歌にもある様に、誠に謡曲会を開くには良い場所であったと思う。会の終った後の公園漫歩もまんざらでもなかった様子。

二十日（日）　晴　宇治風韻会の会に出場

神大風韻会の有志「安宅」の同山に出る。ちょっぴり元気が、たりないとの批評、元気はあるつもりなのだが……。

十二月

六日（日）　晴　関西学生能楽連盟コンクール大会

於　大阪能楽会館

素謡　「蝉丸」連吟「安達ヶ原」（コンクール参加）

「安達ヶ原」残念にも四位、入賞を逸す。

一同、一時がっかり、特に四年生は一層がっかりしたことだろう。

コンクール後の講評はまったく何が講評かと言いたくなるようなものであった、もっと具体的な、適切な講評をしてもらいたいたかった。でなければ、ただ順位を決めるだけのものにすぎず、会そのものとしての意義がどこにあるのか、わからなくなる。又、連盟側の運営面、特に番組の数の点に対する批難、部内で喧々囂々。連盟側の反省を望む。

以上が今までの活動状況ですが、今後の予定は、十二月下旬、謡納メ会、新年に入って三月十日から二週間程強化練習、三月下旬に第九回卒業生歓送会を行う予定です。

なお、会以外では、週一回、宇治正夫先生の来学を得て、昼休みに学生集会所で御指導を受けております。

(1950.12.10.M.N)

編集後記

○一昨年来の懸案である会誌第一号、ようやく誕生することになりました。度々の編集方針の変更でよろめきながらも、どうにか恰好がついた感じです。まだ生れたばかりの雑誌ですのでこれからの発展に望みをかけたいものです。

一番心配していた資金も先輩各位の絶大なる御援助を賜りまして準備が出来ました。ここに厚く御礼申し上げます。

○何しろ、初めてお目にかかる人に原稿をお願いするものですから、恐る恐る言う始末でしたが、風韻会の状態を聞かれたり「仕舞はサシの開きが大切だよ」等々、親しみを思てて話された時には、涙が出るほどうれしかったネ。編集が進まず、参っていた自分にもりもりファイトが湧いて来たネ、一つぱいのコーヒがこんなにうまいとは！

○名簿は凌霜会名簿を中心にして、手紙連絡をとって、大体正確になったと思います。

編集は訪問、電話で集中攻撃を加え、最後は「将を得んとせば……」で、奥様を口説き、原稿をお願しました。

○最後にこの会誌発刊にあたって御支援を賜りました各位に心から御礼申し上げます。

雪解けの冷い水がせせらぎを流れ始めます。変転めぐるましい世相にあって、悠々として進み行く〝風韻〟の姿は頼しいものです。

皆々様の御活躍を祈って止みません。

（松岡）

編集委員

原　敏郎
福光俊六
松岡誠夫
永田守男
山本閏一
久下昌男

昭和三十六年三月十五日　印刷
昭和三十六年三月二十六日　発行

発行所　神戸大学風韻会
神戸市灘区六甲台町

印刷所　水三島紙工株式会社
大阪市城東区野江中ノ町一丁目一一
電話大阪33―二八二八番